

終点に向けて

彼女の棺に「永遠の愛」を一輪添える。

彼女の穏やかな、生気の抜けた顔は今までで、いや、この世で一番美しい寝顔だった。

棺を車に積む。そして、とりあえず家に入れる。

次の日、彼女と暮らしていくための貯金をすべて叩いて小さな花畑を購入する。

月下美人……とは行かなかったが丁度夏に咲く百合が一面に広がる花畑を購入できた。

――彼女が眠るのにピッタリのベッドだと思う。

彼女は銀河鉄道に乗っていく。旅に出る。

私は彼女のためなら体をなんべん灼かれましたって構わなかった。

……それなのに。

彼女の本当の思いに気づくことなく、彼女が幸せの裏で苦しんでいた。

最期には寄り添うことができただろうか？

部屋の金魚を見やる。ぷかぷかと、何も知らないで泳いでいる。いや、知っているのか
もしれない。

『彼女は君と一緒にいたかった』

『最期も、君だけが生き残るつもりか』

聞きたくない言葉が頭を侵食する。リフレインする。

私は彼女のためと言いながら、自分だけが生き残っている。彼女は生きることができなかつたのに。

いいや、私が彼女を綺麗なまま、永遠に生かすのだ。

それは私の思い出の中で、それは私の………

彼女の写真には、生きた彼女の笑顔がたくさん残っている。たまらなく胸が締め付けられ、思わず嗚咽が漏れる。

翌日、彼女を小さな花畑に埋葬する。

